

財団法人板垣会の歴史

公文 豪(高知近代史研究会)



昭和23年から発行された五拾銭札

板垣伯銅像記念碑

建設同志会の設立

板垣退助は、大正八年七月十六日午前八時半、東京芝愛宕下の邸で亡くなった。八十三歳だった。没後、高知を訪れた宮城県知事森正隆(旧自由党员)は、高知に板垣の顕彰施設が何一つなく、特に潮江新田の旧邸が荒廃していることに驚き、土佐人の「忘恩」を強く警告した。これも板垣退助の銅像建設を促す要因になったらしい。

大正九年三月十六日、安芸喜代香・弘田永清・大島更造・宇田友猪・谷流水・弘瀬重正・松尾富功祿・葛目成茂の八名が、高知公園にあった県教育会内で、記念碑建設について協議した。さらに六月から七月にかけて会合を重ね、「板垣伯銅像記念碑建設同志会」を結成。山本忠秀等理事十六名を置き、理事長に県教育会長の安芸喜代香を選任する。



戦前の銅像

建設同志会は、同十年四月二日に寄付金募集の許可を得、監事に森下高茂等五名、専務理事に弘田永清、池田永馬を推挙。事務所を高知市役所内に設け、県下一万円を目標とする募金活動を開始した。ところが十二月十日に安芸理事長が急逝。あらためて会長に知事安倍亀彦、副会長に高知市長松尾富功祿を選任し、銅像建設資金も三万二千元以上と増額決定した。

この後、高知市会が市費二千元、土佐郡会が郡費九百円の寄付を議決したほか、県下各市町村で賛同拠出者が相次いだ。東京大相撲協会も、板垣生前の相

撲振興の恩顧に報いるため銅像建設募金に賛同。浜口雄幸・坂本素魯哉・大石大・国沢新兵衛・竹内明太郎・水野吉太郎の六代議士を中心に板垣伯記念角力後援会が結成されると、同十二年二月国技館で寄付興行を行い、純益二万五千七百円を寄付した。これにより銅像建設資金は目標額を超えて集まった。

大正十二年十二月五日、追手門内を埋める二万余の会衆が見守る中、板垣退助の銅像は孫の守正の手で除幕された。銅像制作は宿毛出身の塑像家本山白雲、標名の揮毫は西園寺公望、工事監督は島崎猪十馬がつとめた。本山白雲の傑作と評された銅像の高さは、台座をふくめて二十二尺七寸。総建設費は一万五千六百四十六円九十九銭だった。

翌十三年、建設同志会は中島町高野寺門前に「生誕地碑」、銅像横に「銅像由来碑」、丸山台に「外遊帰郷歓迎地碑」、潮江新田に「旧邸跡碑」を建立。さらに中城直正執筆・宇田友猪校閲『板垣退助君略伝』を出版した。次いで、剰余金三千円を資産として財団法人設立を申請。大正十四年四月十七日許可され、「財団法人板垣伯銅像記念碑建設同志会」が設立をみた。

財団法人板垣伯銅像記念碑建設同志会の活動

財団法人(登記は大正十四年五月二十八日)の目的は、「故伯爵板垣退助先生の高知県に在る銅像及記念碑の保管手入並記念の祭典集会講演を為す等永く追慕の事に当る」ことであつた。最初の理事は、松尾富功祿・谷流水・島崎猪十馬・池田永馬・弘田永清・久万裕・上岡清忠・別府寅太郎・石黒猛太郎の九名で、初代理事長に松尾富功祿が就任した。その後の理事には、西本直太郎・宮地元治・溝渕幸馬・中島鹿吉・川渕治馬・水野吉太郎・大野勇などがいる。多くが青年時代に自由民権運動に参加して板垣の薫陶を受けた人々であつた。

建設同志会は、毎年四月六日に岐阜遭難記念会、七月十六日に法要を行ったほか、『立国の大本』の復刊、板垣の論著『岐阜中教院に於ける遭難時の演説』『後藤象二郎伯追悼演説』『西郷南州と予との関係』『板垣伯逝去当時を偲ぶ』(いずれも小冊子)などの出版に取り組んだ。



板垣会館と板垣会の成立

一方、「板垣会」は、板垣会館建設後援会を母体として生まれた。

板垣会館の建築は、昭和八年の板垣第十五周忌法要の際、高野寺住職谷信讚が「敷地を提供し、相応の費用及び維持費を負担する」という声をあげたことにはじまる。

同十年二月十九日、横山又吉・溝淵幸馬・山本正心ら五十八名は高野寺に集会し、板垣会館建設後援会を結成。県下有志からの寄付に加えて野村茂久馬・横綱玉錦・頭山満・胎中楠右衛門らの骨折りで再び国技館で寄付相撲が行われ、約三万三千七百円の建築資金を得た。

高野寺境内(板垣の生誕地)に建てられた外観が洋風の板垣会館は、二階に陳列室・集談室・食堂・



板垣会館

事務室、二階に七十二坪の講堂や和室を備えていた。

昭和十二年四月六日の落成式には、五十九年ぶりに来高した頭山満が出席して話題となった。頭山は、前日に潮江山の楠瀬喜多の墓に詣でて、過ぎし日の民権ばあさんとの交流を偲んだ(この時の記念写真が、現在、自由民権記念館に寄託されている)。翌七日、頭山も出席して会館講堂で憲政功労者の慰霊祭が行われ、島本仲道・坂本直寛・北川貞彦ら立志社員が悪戦苦闘を回想した。

会館建設が終わると、役割を終えて建設後援会は解消。十二年八月、その後身として板垣会が結成された。顧問その他は前組織そのままだった。常務理事には池田永馬が就任して会を代表した。当時、池田は財団法人板垣伯銅像記念碑建設同志会の代表でもあり、戦前における板垣退助顕彰活動の中心人物と言ってもよかつた。板垣会は、「憲政と土佐」や「板垣退助先生銅像供出録」などを出版している。

財団法人板垣会へ衣替え

昭和十八年二月二十五日、「財団法人板垣伯銅像記念碑建設同

志会」は、名称を「財団法人板垣伯銅像保存会」へ変更する。

ところが戦局はますます悪化。各地の銅像は軍需物資として供出されるようになった。板垣銅像も同じ運命をたどり、同年九月二日、四十余名が出席して壮行式典が執り行われる。当日は、祭主の財団法人板垣伯銅像保存会理事長の大野勇(高知市長)が祭文を朗読。高橋三郎知事は「壮行の辞」で、「今日茲に板垣伯の尊き英像再び現身と化し米英撃滅の第一線に立たんとするのであります」と述べた。銅像は九月十二日に解体を終えた。

財団法人板垣伯銅像保存会は、供出によって「銅像保管」という目的を失った。このため、敗戦間近の昭和二十年五月十日に板垣会と合併。名称を「財団法人板垣会」に変更し、目的も「本法人は故伯爵板垣退助先生の遺徳を顕彰し君国に寄与するを以て目的とす」と改めた。

現在に続く財団法人板垣会はこうして誕生したが、板垣会が事務所を置いていた板垣会館は、それから二ヶ月後の七月四日、無惨にも高知空襲で焼け落ちてしまった。

昭和二十二年十月十日、財団法人板垣会は戦時色を二掃し、新時代にふさわしく、目的も「板垣退助先生の遺徳を顕彰し民主的文化国家の建設に寄与するを目的とす」と改めた。その後、さらに「故板垣退助先生の遺徳を顕彰し、自由民権

思想の拡充徹底に努め民主的文化国家の実現に寄与することを以て目的とする」と改めて現在に至っている。

戦後の板垣会とその役割

昭和二十年代以降に板垣会理事をつとめた人々に、福永久寿衛・安芸義清・谷信讚・野村茂久馬・長尾正元・岡村三省・中島龍吉・岩川真澄・里見義裕・橋詰延寿・吉松清・寺尾豊・平尾道雄・竹内三賀男・中島内記・吉村真二等がいる。戦後の高知を代表する顔ぶれと言つてよいだろう。

板垣退助は、明治の人々にとって自由の神様であり、土佐人にとっては維新の元勳として郷土の誇りであった。戦前、その名声は坂本龍馬をも凌いだ。戦後になると、昭和三十一年の銅像再建除幕式の参列者が僅か五十名だったように、人々の関心は薄れてしまった。しかし、これまで二度も紙幣の肖像に描かれ、歴史教科書に写真が掲載されるなど、高知が生んだ偉人としての全国的知名度は抜群である。「板垣死すとも自由は死せず」の言葉とともに、憲政史に残る板垣の功績も不朽であろう。その顕彰団体として八十三年の歴史をもつ財団法人板垣会の果たすべき役割は、まだまだ大きいと言わねばならない。